

〈実践報告〉

オリンピックミュージアムを活用したオリンピック教育の実践 —高校生のラグビー選手を対象に—

兼松由香*

1. はじめに

東京オリンピック・パラリンピック（以下、東京2020）が閉幕し、早1年が経った。新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）感染拡大に伴い、開催の是非が問われる中、国内において継続的に実践されたのがオリンピック・パラリンピック教育（以下、オリパラ教育）である。スポーツ庁によって、政策における国際交流・国際協力の一つとしてオリパラ教育が推進され、全国のオリパラ教育推進校で展開された¹⁾。また、東京都教育委員会は、2016年度から6年間、都内全公立学校・園において「東京都オリンピック・パラリンピック教育」を実施し、大会後も継続していく東京2020レガシーを発表している²⁾。さらに、公益財団法人日本オリンピック委員会（以下、JOC）は、2011年以降実施している「オリンピック教室」を今なお継続している³⁾。

国際オリンピック委員会（以下、IOC）は、卓越、友情、敬意・尊重というオリンピックの価値（以下、オリンピックバリュー）を掲げ、若年者に知識としてだけでなく、スポーツ実践の中でこれらの価値を体得し、日々の生活での転移による行動変容を意識し期待するようになった⁴⁾。すなわち、オリンピックの開催地や開催の有無に関わらず、今後もオリパラ教育が継続的に実践され、それらによってもたらされる人々の行動変容こそが東京2020のレガシーになるのではないだろうか。

前述したJOCの「オリンピック教室」では、オリンピック出場者（以下、オリンピック選手）を講師とし、中学2年生を対象に実技と講義によるオリンピック教育が実践されている。また、同委員会は、ナショナルコーチアカデミー事業（以下、NCA）において、各競技種目のトップコーチを対象としたプログラムに、オリンピック史の専門家による「オリンピック論」を取り入れている⁵⁾。このように、オリンピックを目指す選手たちを育成する指導者自らがオリンピックについて学び、選手たちを育成する過程でオリンピック教育を実践することは、オリンピックの出場の有無に関わらず、競技の中で体得したオリンピックバリューを発信できる人、すなわち『オリンピック選手』の育成につながるのではないだろうか。

このような考えに基づき、公益財団法人日本ラグビーフットボール協会（以下、JRFU）における女子セブンズユースアカデミー（以下、アカデミー）は、2019年からオリンピック教育を活動プログラムに取り入れている。本アカデミーのオリンピック教育の講師を担当するヘッドコーチは、2016年のリオデジャネイロオリンピックに出場したオリンピック選手であり、NCAの修了生でもある。本プログラムは、東京都教育委員会（2016）におけるオリパラ教育の取組の基本的枠組である「4×4の取組」⁶⁾を学習プロセスのベースにし、「学ぶ」「触れる」「創る」「伝える」の4つの活動で構成されている。競技団体として初のオリンピック教育の実践報告⁷⁾（以下、先行研究）では、2019年と2020年の活動事例を通して、COVID-19感染拡大前後を比較した。その結果、オンライン形式においても「学ぶ」と「触れる」でインプットしたオリンピックバリュー⁸⁾やオリンピックバリューを「創る」と「伝える」でアウトプットすることが可能となり、対面形式と同様の教育効果がみられたとされている。しかしながら、この先

* 東海学園大学スポーツ健康科学部

行研究は、競技団体における先行事例のない中で模索的に行われ、対象者の競技、年齢、性別が限定された一事例にすぎない。

一方、2019年には日本オリンピックアカデミーにおいて、スポーツミュージアムを活用した実践が行われた。ここでは、3つの教育目標⁹⁾が掲げられ、1) 当時の歴史や社会背景を理解する、2) 自分の考えを他者に伝える・他人と協力することの大切さを学ぶ、の2点は概ね達成されたと報告されている¹⁰⁾。こうしたミュージアムを活用したオリパラ教育の実践報告等を参考に、対象者やプログラム構成を変えた教育実践を蓄積することは、多角的な視点からそれぞれの特性を比較検討することが可能となる。それらによって得られた知見は、多様な人々に教育効果をもたらすための新たな教育プログラムの開発に資すると考えられる。

そこで、本稿では、2022年に男女の高校生のラグビー選手を対象とした、オリンピックミュージアムを活用したオリンピック教育の実践事例を報告する。先行研究では、女子選手のみを対象に①「学ぶ」②「触れる」の順にプログラムが実施された。また、2019年・2020年のアカデミーの対象者は中学3年生から高校3年生であったため、2022年の対象者には同プログラムを受けた選手が含まれている。したがって、本稿の検討は、1) 男女併催、2) プログラムの順番 (①「触れる」②「学ぶ」)、3) オリンピック教育を受けた経験がある選手とない選手の混在、の3点が先行研究と異なる。これらを先行研究と比較・検討することにより、性別、プログラム構成、オリンピック教育を受けた経験の有無の観点から、教育効果の違いを明らかにする。また、対象者がどのような価値をオリンピックとラグビーの共通の価値として認識しているのかを検証する。オリンピックと専門競技の価値を関連付けることは、競技を通して誰もがオリンピックバリューを体得できる可能性があることを意味している。本プログラムでは、「学ぶ」の活動で共通の価値を認識し、「創る」や「伝える」の活動を通してそれらの価値を体現することを目指す。このような実践的な教育プログラムの蓄積は、あらゆる競技団体において実践可能なプログラムの構築につながるため、教育実践としての意義を有すると考えられる。

2. 2022年のオリンピック教育の概要

本稿では、本プログラムを構成する4つの活動のうち、「学ぶ」と「触れる」のみに着目する。以下に、2つの活動の概要と先行研究との違いについて述べる。

(1) 活動の目的と対象者

2011年からJRFUにおいて継続的に実施されているアカデミーは、2022年10月時点で男子は57回、女子は80回を数える。2011年11月に開催された第1回のアカデミーは、「世界と戦える可能性を秘めたタレントを発掘し、育成・強化に取り組む活動」として男女併催であった¹¹⁾が、それ以降は男女の活動時期や頻度が異なり、男女の選手たちが交流する機会がほとんどなかった。本活動では、2泊3日の合宿を通して、オリンピック教育の「触れる」と「学ぶ」の活動を高校生男子18名、女子8名が共に行なった。そのうち、過去にオリンピック教育を受けたことのある選手は、8名(男子7名、女子1名)であった。女子選手のみを対象とした先行研究とは異なり、男女の選手を対象とすることで、性別によるオリンピックやラグビーに対する考え方の相違の有無を検証することが可能となると考えられる。

(2) 活動日時・場所とプログラムの構成

本活動は、2022年9月23日・24日の2日間を通して、以下のとおりに展開した。

- 1) 「触れる」: 日本オリンピックミュージアム(以下、JOM)を鑑賞し、オリンピックに関する歴史資料に触れる。

- 2) 「学ぶ」：オリンピックの理念やオリンピックバリューについて講義形式で学び、グループワークによってラグビーとオリンピックの共通の価値について考える。

先行研究では、知識学習の後にミュージアム鑑賞を行なったため、知識学習で実施したワークシートの回答には、ミュージアム鑑賞による教育効果が反映されていない。本プログラムでは、知識学習の前にJOM鑑賞を行なったため、ミュージアム鑑賞後のアンケートの回答から、ミュージアムの教育効果を検証することが可能となると考えられる。

(3) 教育効果の検証方法

前述の通り、JOM鑑賞後にアンケートを実施し、講義ではワークシートを活用した。アンケートでは、1) 過去のJOMの鑑賞回数、2) 印象に残った展示物（体験含む）とその理由を3つ、3) オリンピックの価値を3つ、の順に設問した。また、講義のはじめに選手たちは、過去にオリンピック教育を受けた回数を記入し、スライドに示された設問（表1）順にワークシートに回答した。

表1. 講義で活用したワークシートの設問項目

問	内容
1	「オリンピック」から思い浮かべること *複数回答可
2	「ラグビー」から思い浮かべること *複数回答可
3	近代オリンピックの創始者
4	①オリンピックシンボルを描く
	②オリンピックシンボルに色をつける
5	五輪が表現していること
6	オリンピックシンボルの色が表現していること
G	これまでのオリンピックやラグビーの大会で印象に残っている出来事について
7	オリンピックとラグビーの共通の価値 *複数回答可

G：グループディスカッション

これらのアンケートおよびワークシートの回答と先行研究の結果を比較し、前述した3つの観点から検討する。

3. オリンピックミュージアム鑑賞：「触れる」

ミュージアム鑑賞に参加した25名の選手のうち、過去にJOMに訪れたことのある選手はいなかった。選手たちは、事後アンケートの設問項目について周知されないまま、約1時間自由にミュージアムを鑑賞した。以下に鑑賞後のアンケートの結果について述べる。

(1) 印象に残った展示物（体験含む）

JOMは、1階にWELCOME AREA、2階にEXHIBITION AREAが設けられている。WELCOME AREAには、企画展やイベントスペースであるウェルカムサロン、オリンピックスタディセンター、EXHIBITION AREAには、主に10の展示物および体験コーナーが設けられている。また、屋外はMONUMENT AREAとし、日本でオリンピックが開催された際の聖火台¹²⁾の縮小版が設置されている¹³⁾。それらの鑑賞を通して、選手たちが印象に残った展示物（体験含む）を表2に示す。

表2の結果、最も回答数が多かったのは「体験」であった。回答した22名は全体の88%にあたり、

表2. 印象に残った展示物（体験含む）

回答内容	回答数	回答内容	回答数
体験	28	表彰台	1
五輪に関する展示	10	メダル	1
選手が使ったものの展示	7	チケット	1
日本のオリンピックの名前	6	サイン	1
聖火に関する展示	7	古代オリンピック	1
オリンピックのストーリー	4	木のイスと机	1
絵・イラスト	4	人へ、オリンピックの力	1
アントラージュ	2	回答者25名、合計回答数75(1人3つ)	

*体験は「ジャンプ体験」や「陸上体験」等複数あるため、1人2つ以上の回答も含まれる

男子選手全員が含まれていた。また、体験について複数回答する選手も確認できた。印象に残った理由は、「思っていた以上に難しい」「実際にやるとオリンピックの凄さを実感した」等が述べられていた。実際に自分自身の身体を動かし、オリンピックに近づこうとすることで、オリンピックの身体能力の高さを体感したのであろう。このような体験は、視覚、聴覚で感じる展示物や映像に比して、記憶に残る傾向があると考えられる。

(2) オリンピックの価値

JOMには、さまざまなところにオリンピックに関する重要なキーワードが示されている。例えば、エントランスの階段にはオリンピックのモットー¹⁴⁾、屋外のベンチにはオリンピックバリューが刻まれている（写真1・2）。

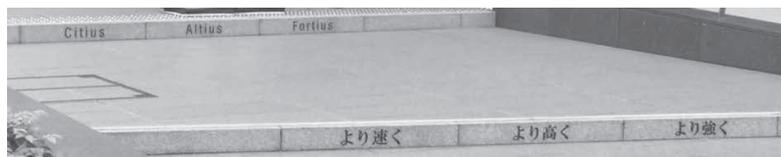


写真1. 階段に刻まれたオリンピックのモットー（日本オリンピックミュージアム）



写真2. ベンチに刻まれたオリンピックバリュー（日本オリンピックミュージアム）

こうしたキーワードは、選手たちの目に留まったであろうか。また、これらはどのように受け止められたのであろうか。JOM鑑賞後に選手たちが回答したオリンピックバリューを表3に示す。

表3の結果、最も回答数が多かったのは3人に1人が回答した「平和」(9名)であった。先行研究では、ミュージアム鑑賞前の知識学習の最後にオリンピックバリューについてグループディスカッションを行った。その結果、表2の上位3つの「平和」「敬意尊重」「友情」が挙げられていた¹⁵⁾。一方、「メダル」

表3. オリンピックミュージアムの鑑賞後のオリンピックバリュー

回答内容	回答数	回答内容	回答数	回答内容	回答数
平和	9	共生	1	アスリートファースト	1
敬意/尊重/尊敬	7	表現力	1	協調	1
友情/仲間/Friendship	5	使命	1	影響	1
表彰/結果/勝敗	3	感謝	1	勇気	1
感動	3	人との関わり	1	Inspiration	1
世界	2	知る	1	希望	1
努力	2	学ぶ	1	喜び	1
平等	2	考える	1	わ	1
思いやり	2	人種	1	色	1
競争	2	国・地域	1	復興	1
文化	2	つながり	1	支え合い	1
団結	2	国のまとまり	1	広げる	1
気持ち/精神	2	スポーツマンシップ	1	統べる	1
卓越/Excellence	2	ライバル	1	発信	1
歴史	2	回答者25名、合計回答数75(1人あたり3つ)			

と回答した選手はいなかったが、競技の結果に関する3つの回答を確認できた。このように、先行研究の知識学習のグループワークであげられた数々のオリンピックバリューが、知識学習前にあげられたことは、ミュージアムの教育効果であると考えられる。

以上、JOM鑑賞では、体験やさまざまな展示物を通して、オリンピックの歴史に触れた。選手たちの多くは、IOCが掲げるオリンピックバリューである「敬意・尊重」「友情（仲間）」を感じ取り、オリンピックが「平和」の祭典であることを理解したと考えられる。

4. 知識学習：「学ぶ」

JOM鑑賞の翌日、選手26名を対象に講義形式の知識学習が行われた。全体を7グループに分け、個人でワークシートに回答する時間とグループでディスカッションをする時間を織り交ぜながら実施された。7つのグループのうち1グループはオリンピック教育を受けた経験のある選手のみで構成された。

講義の主な内容は、1)「オリンピック」と「ラグビー」それぞれから思い浮かべること、2) オリンピックシンボルに関すること、3) オリンピックとラグビーの共通の価値、の3つである。それらの個人およびグループの回答について順に述べる。

(1) 「オリンピック」と「ラグビー」から思い浮かべること

講義のはじめに、「オリンピック」から思い浮かべることと「ラグビー」から思い浮かべることについて、選手たちは個人でワークシートに回答した。回答は複数可とし、1人あたり最も多かった回答数は、「オリンピック」から思い浮かべることが6つ、「ラグビー」から思い浮かべることが7つであった。それぞれの回答を男女（AとB）とオリンピック教育を受けた経験の有無（aとb）に分けた表4と表5に示す。

表4. 「オリンピック」から思い浮かべること

回答内容	回答数					回答内容	回答数				
	計	A	B	a	b		計	A	B	a	b
金メダル/メダル	13	8	5	5	8	夢・目標のあつまっている	1	1	0	0	1
五輪/五輪のマーク/5つの輪	10	7	3	3	7	ボルト	1	1	0	0	1
平和	7	5	2	3	4	式典	1	1	0	0	1
聖火/聖火リレー	5	3	2	3	2	生まれた年	1	1	0	0	1
世界	4	3	1	1	3	名誉	1	1	0	0	1
スポーツ/Sports	4	3	1	2	2	夏冬	1	1	0	0	1
4年に1度	3	2	1	1	2	競争	1	1	0	0	1
世界との交流/交流/海外との交流	3	1	2	2	1	世界が一つに	1	1	0	0	1
開会式	2	1	1	0	2	努力	1	1	0	1	0
感動	2	1	1	0	2	日本が一つになって戦う	1	1	0	1	0
陸上	2	2	0	0	2	応援	1	1	0	1	0
友情/国際友情	2	1	1	1	1	表彰台	1	1	0	1	0
尊敬	2	2	0	2	0	ロンドン	1	1	0	1	0
国が団結する/国がまとまる	2	2	0	2	0	北京	1	1	0	1	0
選手村	2	1	1	1	1	経済影響	1	1	0	1	0
みんな平等/平等	2	1	1	1	1	わ	1	0	1	0	1
リレー	1	1	0	0	1	多様性	1	0	1	0	1
閉会式	1	1	0	0	1	スポーツ愛	1	0	1	0	1
世界で最も有名な国際イベント	1	1	0	0	1	ピクトグラム	1	0	1	0	1
大会	1	1	0	0	1						

A：男子、B：女子、a：経験あり、b：経験なし
 回答者 26 名、合計回答数 88 (1 人あたりの最多回答数 6)

表5. 「ラグビー」から思い浮かべること

回答内容	回答数					回答内容	回答数				
	計	A	B	a	b		計	A	B	a	b
ワールドカップ/ラグビーワールドカップ	11	9	2	5	6	Hポール	1	1	0	0	1
トライ	8	4	4	3	5	自分が全力で楽しめるスポーツ	1	1	0	0	1
タックル/Tackling game	7	3	4	2	5	人生	1	1	0	0	1
ラグビーボール/楕円球/特殊なボール/ボール	6	4	2	1	5	ステップ	1	1	0	0	1
ハカ	5	4	1	3	2	格闘技	1	1	0	0	1
コンタクトスポーツ	4	4	0	3	1	カッコイイ	1	1	0	0	1
仲間	4	2	2	1	3	オリンピック	1	1	0	0	1
ノーサイド精神/ノーサイド	4	3	1	2	2	Attack and Defence game	1	1	0	0	1
ニュージーランド	3	2	1	1	2	努力	1	1	0	1	0
紳士/紳士のスポーツ	3	2	1	1	2	尊敬	1	1	0	1	0
15人制	3	2	1	1	2	スクラム	1	1	0	1	0
7人制	3	2	1	1	2	ラグビー校	1	1	0	1	0
2015年日本VS南アフリカ/ワールドカップで南アフリカに日本代表が勝利	2	2	0	1	1	ケガ	1	1	0	1	0
オールブラックス	2	2	0	1	1	つなぐ	1	0	1	0	1
花園	2	2	0	0	2	助け合う	1	0	1	0	1
チーム/チームスポーツ	2	2	0	0	2	ごつい人	1	0	1	0	1
激しい	2	1	1	0	2	コミュニケーション	1	0	1	0	1
日本代表	2	2	0	1	1	多様性	1	0	1	0	1
協力	2	0	2	0	2	スピード	1	0	1	0	1
ノックオン	1	1	0	0	1	友情	1	0	1	0	1
信頼することが大切	1	1	0	0	1	個々が生きるスポーツ	1	0	1	0	1
2019年日本VSスコットランド	1	1	0	0	1	走	1	0	1	0	1
パス	1	1	0	0	1	ONE TEAM	1	0	1	0	1
キック	1	1	0	0	1	赤いユニフォーム	1	0	1	1	0

A：男子、B：女子、a：経験あり、b：経験なし
 回答者 26 名、合計回答数 104 (1 人あたりの最多回答数 7)

表4の結果、「オリンピック」から思い浮かべることは「メダル」(13名)が最も多く、次に多かったのは「五輪」(10名)、「平和」(7名)であった。この上位3つの回答は、先行研究の結果¹⁶⁾の上位4つに含まれていた。先行研究では1名のみの回答であった「聖火」が、本実践で多かった理由として、前日に行われたJOM鑑賞において、聖火に関する展示物を多く目にした影響があると考えられる。

表5の結果、「ラグビー」から思い浮かべることは、「ワールドカップ」(11名)と「トライ」(8名)、「タックル」(7名)といったプレーに関する回答が9つ回答された。2015年と2019年のラグビーワールドカップでは、15人制ラグビー男子日本代表チームが歴史的勝利を挙げ¹⁷⁾、日本のみならず世界中でラグビーが注目された。いくつかの回答には、その2大会の印象に残った試合について明記されていた。7人制・15人制どちらもプレーする高校生のラグビー選手たちにとって、ワールドカップは憧れの大会の一つであるだろう。他には「ボール」や「ニュージーランド」に関する回答が複数みられた。その理由として、ラグビーボールは楕円球という特徴があること、また、ラグビー王国とされるニュージーランドでは、「オールブラックス(ニュージーランド代表チームの愛称)」や「ハカ(オールブラックスの試合前の儀式)」が有名であることが考えられる。その他、ラグビー精神の一つである「ノーサイド」¹⁸⁾や、それに関連する「仲間」や「友情」の回答も複数みられた。

以上、表4と表5から性別やオリンピック経験による特徴はみられなかった。また、オリンピックとラグビーから思い浮かべる共通の言葉として「尊敬」「多様性」「努力」「友情」がみられた。

(2) オリンピックシンボルに関すること

オリンピックシンボルに関する設問は、全7問のうち問3～6にあたる。具体的には、問3)近代オリンピックの創始者、問4)オリンピックシンボルを描く(①は形、②は色¹⁹⁾)、問5)5つの輪が表すもの、問6)シンボルの6色²⁰⁾が表すものである。それぞれの回答の結果を表6は男女別、表7はオリンピック教育の経験別に示す。

表6. オリンピックシンボルに関する設問の回答結果(男女別)

		問3		問4①		問4②		問5		問6		計	
女子	8	2	25%	2	25%	7	88%	2	25%	2	25%	15	38%
男子	18	8	44%	6	33%	9	50%	10	56%	2	11%	35	39%
計	26	10	38%	8	31%	16	62%	12	46%	4	15%	50	38%

表7. オリンピックシンボルに関する設問の回答結果(オリンピック教育経験別)

		問3		問4①		問4②		問5		問6		計		
オリンピック教育経験	なし	18	4	22%	6	33%	12	67%	4	22%	3	17%	29	32%
	あり	8	6	75%	2	25%	4	50%	8	100%	1	13%	21	53%
計		26	10	38%	8	31%	16	62%	12	46%	4	15%	50	38%

表6と表7の結果、全体の正答率は38%、最も正答率が高かったのはオリンピックシンボルの色(62%)であった。その理由として、選手たちは前日にJOMの前で巨大なシンボルと記念撮影をし、JOM内でもシンボルを目にする機会が多かったことが考えられる。一方で、オリンピックシンボルの形や、五輪の形や色が表しているものの正答率は低かった。すなわち、オリンピックシンボルを記憶している選手は少なかったことを意味している。表6から男女別の正答率の特徴はみられなかったが、表7では、オリンピック教育を受けた経験のある選手たちは経験のない選手たちに比して、全体的に正答率

が高かった。しかし、先行研究の正答率（55％）に比すると、ほとんど変わらなかった。オリンピック教育の経験のある選手全員が、2020年以降²¹⁾に、アカデミーの活動でオリンピック教育を受けた選手たちであった。先行研究によれば、2020年の知識学習においても設問項目に問2と問7以外は含まれている。したがって、過去のオリンピック教育の教育効果は定着していなかったといえる。

個人で回答した後、グループで互いの描いたシンボルを共有し、グループで一つシンボルを描いた。その結果、オリンピック教育を受けた経験のあるグループを含む3グループが、形も色も正しいシンボルを描くことができた。

(3) オリンピックとラグビーの共通の価値

最後に、グループ内で、過去のオリンピック、あるいはラグビーの大会で印象に残っている出来事について話し合った。その結果、グループ内であがった主な出来事は競技大会の結果（勝利）に関する内容であった。

その後、いくつかのオリンピックの象徴的な出来事²²⁾について講師が紹介し、オリンピックとラグビーの共通の価値について選手たちは個人でワークシートに回答した。その結果を表8に示す。

表8. オリンピックとラグビーの共通の価値

回答内容	回答数					回答内容	回答数				
	計	A	B	a	b		計	A	B	a	b
尊重/試合が終われば尊重し合う関係/尊敬/相手を尊重すること/Respect	13	9	4	7	6	団結	1	1	0	0	1
平和/世界平和	12	10	2	4	8	Discipline	1	1	0	0	1
黒人も白人も参加できる/平等	9	6	3	3	6	Intensity	1	1	0	0	1
友情/Friendship	9	6	3	2	7	努力	1	1	0	1	0
思いやり/思いやる気持ち	4	1	3	1	3	協調	1	1	0	1	0
感動	3	3	0	2	1	フェアプレー	1	1	0	1	0
仲間	2	2	0	0	1	ライバル	1	1	0	1	0
全選手たちをたたえること/互いをたたえあうこと	2	1	1	0	2	世界	1	1	0	1	0
情熱/Passion	2	1	1	1	1	みんなが見て楽しい	1	1	0	1	0
卓越/Excellence	2	1	1	0	2	つながる	1	0	1	0	1
選手に対しての配慮	1	1	0	0	1	多様性	1	0	1	0	1
競争	1	1	0	0	1	知る	1	0	1	0	1
世界中の人が見て楽しめること	1	1	0	0	1	支え合う	1	0	1	0	1

A：男子、B：女子、a：経験あり、b：経験なし
回答者26名、合計回答数74（1人あたりの最多回答数6）

表8の結果、最も多かった回答は「尊敬・尊重」（13人）、次に「平和」（12人）であった。「尊重」は、IOCが掲げているオリンピックバリューとラグビー憲章が掲げているラグビーコアバリューの共通の価値でもある。また、これまでオリンピックバリューやオリンピックから思い浮かべる言葉のみに挙げられてきた「平和」や「平等」は、オリンピックとラグビーの共通の価値と認識されたことが示唆された。

5. おわりに

本稿では、JRFUセブンズユースアカデミーで行われたオリンピック教育の実践について報告した。以下に、取り組みの成果を述べ、1) 男女併催、2) プログラムの順番（①「触れる」②「学ぶ」）、3) オリンピック教育を受けた経験がある選手とない選手の混在、の3点から教育効果についてまとめる。

- 1) 男女併催については、JOM 鑑賞後のアンケートや知識学習におけるワークシートの回答から男女で特徴的な違いはみられなかった。また、男女混合のグループワークにおいて、オリンピックとラグビーの共通の価値について共有・認識することができた。これにより、ラグビー選手たちの育成におけるオリンピック教育は、男女併催、男女別、いずれにおいても学習が可能であり、オリンピックとラグビーの共通の価値を認識するための学習機会を得られると考えられる。
- 2) 「学ぶ」と「触れる」のプログラムの順番は、前後関係がどちらであっても教育効果の相違はみられなかった。すなわち、ミュージアムの立地条件や活動スケジュールに合わせてプログラムの構成を柔軟に決められることが示唆された。また、先行研究を参考に、必要に応じてオンライン形式による知識学習やミュージアム鑑賞も可能であるといえる。ただし、「触れる」の活動を先に実施する場合は、鑑賞する目的を事前に伝える等、その後の「学ぶ」と結びつきが強くなる工夫をすることが重要である。そうすることで、「触れる」と「学ぶ」の活動の相乗効果が期待できると考えられる。
- 3) オリンピック教育を受けた経験のある選手とない選手では、教育効果の相違はほとんどみられなかった。また、先行研究で行われた同様の設問に対する正答率と今回の正答率は変わらなかった。したがって、過去の教育効果は定着していなかったと考えられる。

以上から、本報告は、競技団体におけるオリンピック教育のプログラム構成や実施形態の可能性を広げる事例の一つになると考えられる。男女別の競技の場合、活動は男女で分かれて実施されることが多い。しかし、本報告によりオリンピック教育は男女併催が可能であること、また、併催することによって普遍的な競技の価値やオリンピックバリューを共有できることが新たに見いだされた。一方、本プログラムの「創る」「伝える」の活動は本報告後に実践されたため、「学ぶ」「触れる」のインプットしたことを、選手たちがどのようにアウトプットしたのかは不明瞭である。オリンピック教育において、知識を持つことは大切であるが、それらを活かすこと、すなわちオリンピックバリューを体現することが最も重要である。したがって、今後も本報告を含むオリンピック教育を受けた選手たちの行動変容を追跡していく必要があると考えられる。

来田は、教育的な理念を内包するオリンピックやパラリンピックに教育という語をあえて加えなければならないという現状を打開することの必要性を指摘している²³⁾。今後も様々な競技団体が、競技とオリンピックの価値を関連させながら教育実践の検討を蓄積することは、誰もがオリンピズムを体得できるスポーツプログラムの開発・推進の礎となるであろう。

謝辞

本報告にあたり、本活動にご協力いただきましたJRFU男女セブンズユースアカデミーの選手およびスタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

注および引用参考文献

- 1) スポーツ庁、政策、国際交流・国際協力、オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業（オリパラ教育）、https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop08/list/detail/1407880.htm (2022.10.10 閲覧)
- 2) 東京都教育委員会（2022.5.26 公開）、学校 2020 レガシー、<https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/2020legacy.html> (2022.10.10 閲覧)

- 3) 公益財団法人日本オリンピック委員会、オリンピック教室、<https://www.joc.or.jp/event/class.html> (2022.10.31 閲覧)
- 4) 友添秀則 (2021) オリンピックの価値をめぐって、現代スポーツ評論 44、p.13.
- 5) 公益財団法人日本オリンピック委員会、JOC ナショナルコーチアカデミー事業、<https://www.joc.or.jp/training/ntc/nationalacademy.html> (2022.10.31 閲覧)
- 6) 東京都教育委員会 (2016) 「東京都オリンピック・パラリンピック教育」実施方針、pp3-5.
- 7) 兼松由香 (2022) 中学・高校生の女子ラグビー選手を対象としたオリンピック教育の実践—COVID-19 感染拡大前後の活動事例—、東海学園大学教育研究紀要 第7号 スポーツ健康科学部、pp.18-27.
- 8) オリンピズムは、肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。(JOCによる2021年のオリンピック憲章和訳より抜粋)
- 9) 教育目標として1) 当時の歴史や社会背景を理解する、2) 自分の考えを他者に伝えること、他者と協力することの大切さを学ぶ、3) スポーツと社会の結びつきを理解し、自らの経験とすること、の3点が設定された。
- 10) 石原康平他 (2021) スポーツミュージアムを活用した「謎解きゲーム」の実践報告、中京大学体育学論叢 第61巻 第1号、pp29-38.
- 11) 公益財団法人日本ラグビーフットボール協会、男女62名が参加。第1回「セブンズアカデミー」開催レポート (2009.11.24 公開)、<https://www.rugby-japan.jp/news/4339> (2022.10.31 閲覧)
- 12) 1964年東京大会、1972年札幌大会、1998年長野大会の聖火台が展示されている。
- 13) JAPAN OLYMPIC MUSEUM、エントランス配布資料。
- 14) 「Citius, Altius, Fortius」「より速く、より高く、より強く」「Faster, Higher, Stronger」がエントランスの階段に彫られている。
- 15) 前掲7、p.24.
- 16) 前掲7、p.23.
- 17) 2015年のワールドカップでは南アフリカ代表に歴史的勝利、2019年のワールドカップでは初のベスト8を成し遂げた。
- 18) ノーサイドとは試合終了後に敵・味方がなくなり、互いを称え合うことである。
- 19) 色は、シンボルの青・黄・黒・緑・赤の5色、ここでは順不同であっても正解とした。
- 20) 19)の5色に下地の白を加えた6色を意味する。
- 21) 知識学習の初めに、オリンピック教育の経験があると回答した選手の中で、2020年と2021年のアカデミー経験が2名、2021年のアカデミー経験のみが5名、アカデミーの年不明が1名であった。
- 22) ここでは、1) 東京オリンピック (2021年) の体操選手のレオタード、トランスジェンダーの選手、試合前の黒人差別抗議、2) リオデジャネイロオリンピック (2016年) の難民選手団、両性愛者のプロポーズ、3) 平昌オリンピック (2018年) の小平選手とイサンファ選手の友情、4) メキシコオリンピック (1968年) のブラックパワー・サリュート、の4つの大会の事例について紹介した。
- 23) 来田享子 (2020) 「オリパラ教育」を考える—ジェンダーとSOGIの視点から—、SEXUALITY、No.097、p37.